



教職支援センター ニュースレター

巻頭言

【総合的な探究の時間におけるミーティングソリューションに関する一考察】

私は、授業で合意形成が必要とされる議題を話し合う時には、よくファシリテーションの手法を活用する。それは、各個人の思考を保障し、かつ議論を活発にすることにより、より効率的に目標に近づくことができる(目標達成)からである。また、学生に話し合い活動の行い方を紹介・習得させるためにもファシリテーションの手法を活用している。これまでは、「特別活動の理論と実践」「進路指導・キャリア教育の理論と実践」「教員免許状更新講習 ファシリテーションの理論と実践」で実施したことがある。活用した手法は、マンダラ法→フィッシュボーン法である。学生や教員からは、『このような手法で議論する方法があるとは知らなかった。知ってはいたが、時間がかかるのでしたことはなかった。』というようなコメントが寄せられている。

今年の10月中旬に高校生を対象にしたファシリテーションの手法を活用する機会に恵まれた。今までは大学生や教員(大人)を対象にして行ったことがなかったが、今回、長野県松本深志高等学校の1年生の「総合的な探究の時間」の講師として授業を行うことができた。

平成31年3月に出された「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」P.11には、以下のような記述がある。

第1 目標

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(1)(2)は省略。(3)探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いの良さを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。 *下線は筆者加筆

今回の松本深志高校でのねらいは、各自が設定した課題解決そのものに直結するものではないが、上記の新学習指導要領(高等学校は令和4年度から完全実施)実施の前に、特に(3)の協働的に取り組むとともに、互いの良さを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養うことをねらいとして実施したものである。

使った手法は、アイスブレイク→ブレインライティング¹⁾→親和図法→バタフライテスト→ペイオフマトリックス→プロトタイピングである。

生徒達は、自分たちで決めたテーマの解決のために、3時間真剣に取り組んでいた。

授業後の感想には『自分の課題解決やこれからの高校生活における課題解決に十分役立つ内容であった』とのコメントがあり、わずか3時間という短い時間ではあったが、総合的な探究の時間における最初の段階での主体的・協働的に課題に取り組む手法の一つとして実施していく価値が十分であるとの確信を得ることができた実践となった。



1) ブレインライティングは、ドイツで考案された技法である。欧米人と比べてその場での人間関係を気にしがちな日本人向きで、全員参加で短時間に一定量のアイデアを揃えることができるものである。

田村徳至(教職支援センター 准教授)

シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年以上経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

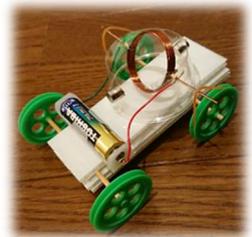
～ vol.14 工学部編 ～

学校法人 文化長野学園 文化学園長野中学・高等学校 教諭

工学部 環境機能工学科 平成30年度卒業



松澤 千晶 先生



2019年3月に、最後の環境機能工学科生として卒業し、早二年が過ぎようとしています。私が勤めている文化学園長野中学・高等学校は、21世紀型能力を育てることを念頭に、生徒の自主性や主体性を育む教育に力を入れています。

私が担当している理科という科目は、実験を通すことで、複雑な現象を身近に感じやすいものですが、その中でも、知りたい・見つけたいという意識を生徒たちに持ってもらえるよう、授業準備を行っています。多くの時間を費やしたもののなか、中学2年生『電気』分野の発展として、モーターカーの作成があります。ただ組み立てるだけでは、モーターの仕組みやはたらきが定着しないと感じ、挑戦しました。コイルとタイヤの連結部分の調整や、車体の軽量化、様々な要素が複雑に絡み合っ、とても苦労しました。しかし、試行錯誤を繰り返す中で、生徒ならどんな部分に悩んでしまうかを知ることができ、改めて自分の強みとは何なのかを考えるきっかけになりました。生徒と積極的にコミュニケーションを図るうえで、魅力的な授業は必要不可欠です。工学部出身として、私が提供できる、私らしい授業とは何なのか。これは教師人生の不変のテーマです。

本年度からは中学校1年生の担任を仰せつかり、悩みながらも、充実した日々を過ごしています。一日の終わりに生徒の顔を思い浮かべながら、明日への課題を見つけることを日課にしています。半年過ぎて強く思うのは、生徒は教師を映す鏡だということです。関わる分だけ、良くも悪くも生徒からの反応があります。学習の方法や人間関係など、思春期の生徒たちの悩みは尽きません。面談をするうえで、一人ひとりの個性を尊重し、経験者として人間同士の話をしたい。自宅よりも長い時間を過ごす学校という社会で、未来に見通しを持ちながら生きてほしいという願いを込めながら、これからも一緒に成長していく所存です。





鎌ヶ谷市立第二中学校 理科 教諭

工学部 環境機能工学科 平成29年度卒業

小林 真璃衣 先生



平成30年度信州大学工学部環境機能工学科を卒業しました。小林真璃衣です。千葉県の教員という職に就いて3年が経とうとしています。大学に入学した当初は教員になることを1ミリも想像出来ていませんでした。教職の先生方に話したら怒られそうですが、教職科目はとりあえず取っておこうというスタンスから始まりました。教職科目は1限や5限に多くあったので、辛い日々を送った記憶がありますが、今の私の糧となっています。とても印象に残っている授業は河野桃子先生の道徳の授業です。道徳教育とは一体何なのか。考えさせられました。特にモラルジレンマの内容やレジュメは実際の授業でも参考にしています。また、中学校では昨年道徳が教科化され、授業のあり方に右往左往している状態ですが、生徒の考えに少しでも変容を持たせることが出来れば道徳の価値というものが光って行くのではないかと思います。

理科の授業ではコロナウイルスの関係もあり、理科室で授業が出来ない、実験ができないという年度始まりでしたが、現在では行うことが出来ています。実験を意欲的に行う生徒が多い学年なので、生徒も私も楽しく授業ができています。授業の中で意識していることは、中学校の内容で説明できることには限りがあるので、高校の内容も交えて話をしています。中学校3学年のイオンの範囲ではどうやってイオンになるのかを貴ガスの電子配置の話をもとに説明しました。

教員は所謂ブラックと言われる職業だと思います。それはこの学校現場を体験して実感しました。ですが、それ以上に得るものが沢山あります。まだまだ経験の浅い私ですが、生徒たちから沢山の事を教わりました。「学び続ける教員」という言葉を大学の講義で聞きましたが、その時はどういう意味かよく分かりませんでした。ですが、今なんとなく答えがみえてきたような気がします。私の中で教員は天職だなと感じています。これからも日々精進していきます。



教職支援センター8～10月の動き



○教職教育委員会学芸員養成課程実施部会(10/19【オンライン】)、○長野県総合教育センター連携講座(「学校教育と情報」(9/16～17)、「教育課程の編成法」(9/24～25))、○教職支援センター拡大打ち合わせ会議(9/9)、○長野県総合教育センターと教職実践演習との協働でカリキュラム研修講座(10/8(上田キャンパス),9(松本キャンパス))、○教員免許更新支援センター会議(10/2【オンライン】)、○長野県総合教育センターとの連携連絡会(10/20)

特別支援学校に行って

今年度、介護等体験に行くことができた3年生から、体験についての報告が届きました！



私は夏休みに特別支援学校の小学部にて介護等体験を行った。二日間の体験であったが、初日と二日目とで異なる児童に注目して体験を行った。

初日の午前中では私も児童も緊張していたため、上手くコミュニケーションをとることが出来なかった。私の注目した児童は少し興奮してしまったのか、朝の会などで上手く言葉を発することが出来なくなった。そのため、私はどのように接していいのかわからず、積極的に関わることが出来なかった。しかし、時間がたち、昼食などが落ち着いた後では、その児童と少しコミュニケーションをとることが出来るようになった。そのため、私も積極的に関わりやすくなり楽しく一日目を終えることが出来た。

二日目に注目した児童は、少し寡黙な子で、静かに工作をしていることが多かった。私は二日目でクラスの雰囲気分かり、児童とより積極的に関わろうと思っていた。そのため、工作で何を作っているのか訊ねたり、一緒に作ったりしてコミュニケーションをとろうとした。するとその児童も何を作っているのか答えてくれ、コミュニケーションをとることが出来た。

初日では打ち解けるのに時間がかかったが、二日目ではより積極的にコミュニケーションをとることにより早く打ち解けることが出来た。ゆえに、この二日間の特別支援学校における介護等体験から、自分からコミュニケーションをとることの重要性を学ぶことが出来た。

(農学部 農学生命科学科 植物資源科学コース 堀 礼人)

深志高校との連携報告



松本深志高校での「信大連携ゼミ」(長野県教育委員会の「未来の学校」構築事業)に、教職支援センターからも5名の専任教員が参加しています。(第2回の詳細については、今号の巻頭言をご覧ください。)以下は、各回のタイトルと担当者です。



- 第1回:「学ぶ」と向き合う(荒井英治郎)…9月26日
- 第2回:「他者」と向き合う(田村徳至)…10月17日
- 第3回:「自分」と向き合う(柘千晶)…11月21日
- 第4回:「幸せ」と向き合う(庄司和史)…11月28日
- 第5回:「問い」と向き合う(河野桃子)…12月12日

ここでの実践についての分析等については、改めてこのニューズレターや当センターの紀要『教育実践研究』等でご報告していきます。

編集後記

今号も、田村先生の高校での授業のお話や、工学部卒のフレッシュなお二人の先生方の声、3年生の介護等体験での気づきなど、多彩な記事をお届けすることができました。新型コロナウイルスを巡る状況はこのところ厳しさを増している感がありますが、そのようななか私達にできることは何なのか。オンライン・対面それぞれのよさをうまく使い分けつつ、学生さん達の教職についての学びをサポートしていきたいと思えます。皆様も、どうぞ年末にかけてくれぐれもお身体にお気をつけてお過ごしください。(広報担当 河野桃子)

